

小杉山円満寺 令和四年星まつり・節分会号

寺だより

新庄市五日町五九一四

TEL 二一・〇四三三三

Fax 二一・〇一六六

発行日令和四年一月吉日

発行人：山尾瑛紀

新年明けまして

おめでとーいねーます

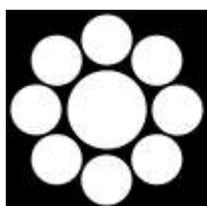
令和四年がスタートして、半月ほどが過ぎました。

御信徒の皆さまには、ますます

お健やかに、お過ごしのことと、心からお慶び申し上げます。

そして、今年一年健やかで幸の多いものとなりますようお祈りいたします。

今回の寺だよりは、「星まつり」について載せました。



星まつりとは

星まつりは、古来より行われてきました宗教的な行事です。人の運勢を司るとされる星々

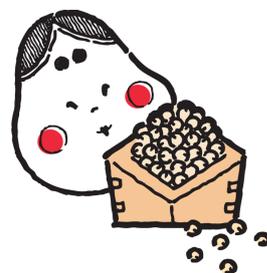
を供養する法要です。

弘法大師伝来の真言密教の秘法をもって、その年の、ひとそれぞれの運命を司る九つの星を供養し、無事息災、一家繁栄、開運招福など所願成就を祈願するものです。

星まつりと

節分会

星まつりは寺院によつ



ては、年末年始や本尊の初縁日に勤められます。

当円満寺は、節分の日にお勤めいたします。

これは、一年間の人の運勢を司るとされる「当年星（とうねんじょう）」とよばれる星が交替するのが春の節分だからです。

当年星は日曜日・月曜日・火曜日・水曜日・木曜日・金曜日・土曜日の七つの星に、古代インドにおいて日蝕や月蝕を引き起こすとされた計都星と羅喉星の二つを加えて九曜日くようせいとよばれます。

年廻り運勢吉区表

木曜日	月曜日	計都星	火曜日	日曜日	金曜日	水曜日	土曜日	羅喉星
● 大凶	○ 大吉	● 大凶	● 大凶	○ 大吉	① 春夏秋冬吉	● 春夏秋冬凶	● 春夏秋冬凶	● 大凶
八四九才	八四八才	七四三才	七四二才	七四一才	七四〇才	七三九才	七三八才	七三七才
八五〇才	八四九才	八五二才	八五一才	八五〇才	八四九才	八四八才	八三七才	八二六才
九六三才	九六二才	九六一才	九六〇才	九五九才	九五八才	九五七才	九五六才	九五五才
七二七才	七二六才	七二五才	七二四才	七二三才	七二二才	七二一才	七二〇才	六一九才
六三六才	六三五才	六三四才	六三三才	六三二才	六三一才	六三〇才	六二九才	六二八才
この星に当る年は運に恵られるが、如し調子に乗らず油断なく気をくばるべし。病難金銭争注意								

表の年齢は、数え年です。

この九つの星のいずれかが、人それぞれの当年星として毎年変わり、一年を左右することから、これらの星々にお供物を捧げたり、護摩供などを勤めてご供養したりして、災いを避けるように祈ります。

節分会と

大黒天さま



節分会星まつりの

ときにお祀りするのは、大黒天さまです。

大黒天は、開運・福德の神様。災難厄病悪鬼を追い払い、様々な福をもたらしてくださいませ。

円満寺

節分会星まつり追難式祈禱

二月三日（木）午後三時 歓喜天堂

◎ 内容 護摩祈禱・法話・豆まき・福引

◎ 祈願料

・星まつりお守 三百五十円
・星まつりお札 二千五百円・三千五百円
五千円



※ 申し込

み書にご記入の上、ファックス・郵送、またはお寺にご持参くださいませよう。お願いいたします。

※ 市内にお住まいの方は、電話をくださいませば、受け取りに伺います。

※ 市外、県外からのお申し込みの方へは、祈禱したお守とお札は、郵送も承ります。（送料は別途いただきます。）

おすすめ

のぼり旗

奉納のご案内

お願い事を込めたのぼり旗を奉納し、一層のご加護を受けてみませんか。



のぼり旗は「大聖歓喜天」のほかにも、「南無大師遍照金剛」「南無虚空蔵菩薩」「子育て地藏尊」「稻荷大明神」があります。

ご奉納いただいたのぼり旗に、「願い事」「名前」を書いて、護摩祈禱の後、境内に掲げます。

△期間▽ 奉納日よりおよそ一年間

△奉納料▽ 一本 2500円

開山四百年

当山は、一六二四年（寛永元年）、初代藩主戸沢正盛公の叔父甚盛上人によって開山されました。

以来、法灯四百年。二〇二四年（令和六年）に、開山四百年という節目を迎えます。

それに当たり、お祝いの行事を行いたいと考えています。

それに向けて、檀信徒の皆さまのお力添えをお願いいたします。

今日の法語「知足」



本能に任せて絶えず欲しいものを求める心に、安心は訪れません。しかし、念願のものを手に入れても、新たな欲望が尽きないのは人の性といえるでしょう。

昨今の国際目標「SDGS（持続可能な開発目標）」という言葉をよく耳にするようになりました。「これで充分です」という多くを求めない「足るを知る心」によって、人は幸せを実感できるといふ教えに深く通じるように感じます。

まずは「足るを知る」ことから世界の人々と心を共にし、幸福な世の中がいつまでも持続可能でありますよう祈りしましょう。

本山智積院季刊誌より引用